



学校通信

令和8年 9月1日
東京都立葛飾盲学校長
竹内 大吾
(第6号)

「災害とセルフアドボカシーの力」

校長 竹内 大吾

長い夏休みが終わり、学校に子供たちの元気な声が戻ってきました。暦の上では既に秋を迎えておりますが、まだまだ残暑厳しい日が続いております。

この夏、熊本での地震や千葉での豪雨など、自然災害のニュースに接する機会がありました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早く穏やかな日常が戻ることを願っています。

こうした災害のニュースに接すると、本校の幼児児童生徒のことを考えます。東日本大震災では、避難所で生活した全盲の方々が、様々な困難に直面したという報告がありました。食事の配布や生活に必要な情報が掲示されても読むことができない、慣れない場所では、トイレの場所やそこまでの経路が分からないなど無事に避難できた後の生活の中に、見えない、見えにくい人ならではの困難があったようです。

このような話から、盲学校で子供たちに育てたい力の1つとして、「セルフアドボカシー」が大事であると考えます。セルフアドボカシーとは、自分自身のことを理解し、自分の思いや希望、必要としていることを自分の言葉で周囲に伝え、必要な支援や配慮を求めていくことです。

これは、単に「助けてもらう」ということではなく、自分のできることと難しいことを理解した上で、必要な支援を具体的に伝えるといった、自分の生活を自分で選び、自分でつくっていかうとする主体性があります。全て他人に頼るのではなく、できる部分には自分で責任をもつことも大事なのです。

そのためには、私たち大人は、子供たちが、困ったときに先回りして手を差し伸べたり、出された要求に全て応じるのではなく、子供自身に、何に困っているのか、何を手伝ってほしいのかを考えさせたり、どこまでならば自分でできるのかを考えさせ、その上で、自分の言葉で伝える機会をつくったりします。それに加えて、見えない、見えにくさがあっても、子供がどのような方法を活用したら自分で判断してできるのかというやり方も教えていくことも大事です。

二学期には、全校での学習発表会、各学部での校外学習や宿泊行事等もあります。日々の学校生活の中での小さな経験の積み重ねだけでなく、こうした様々な行事での経験も、セルフアドボカシーを育てる大切な学びの機会であると考えます。

一人一人の「自分一人でする」と「自分で伝える」を同じように大切にしながら、自立に向けて子供たちの成長を支えていきたいと思います。

今学期も、本校の教育活動への御理解と御協力を、どうぞよろしくお願いいたします。